

「ふにゃ弁慶」

作・平野正喜（ひらのまさき）

【あらすじ】

場所は勸進帳で知られる安宅の関を過ぎたあたり。鎌倉幕府の追手を逃れ、関所をなんとか超えた義経一行が休んでいる。他の家来を遠ざけて義経が弁慶に話しかけたところで、柝が鳴って動きが止まり、狂言作家が登場。黒子として経緯や用語を観客に説明すると言いだし、柝を鳴らすことで義経と弁慶の古風な会話を演出し始める。ところが、実はこの主従は二人だけの時はやんちゃ坊主とお調子者。しかも、義経は狂言作家が見えており、長い説明を嫌って狂言作家を脅し、話を好きなように操り始める。仕舞にはお調子者の弁慶を怖がらせようと、狂言作家に「船弁慶」の知盛の幽霊を演じさせる。嫌がっていた狂言作家がだんだん調子に乗り出すと、啞然としていた弁慶も船弁慶の名セリフで反撃。弁慶の祈祷と狂言作家の『船弁慶』のかけ声の応酬となるが、義経の悪戯で狂言作家は「ふにゃ弁慶」と叫んでしまう。これに怒った弁慶、実は狂言作家が見えていたことを明かし、主従で踏みつける。懲らしめられた狂言作家の悲痛な声で歌舞伎風の幕引きとなる。